

2024.09.24.

T.Kobayashi

大相撲秋場所観戦記録

●初日の印象

翠富士が肩すかしを狙ってくるところをかまわず叩き込んだ遠藤の足の運びに安定感が感じられた。若隆景・美ノ海戦は好取組と睨んでいたが、美ノ海の巧さと速さの方が勝っていた。若隆景は相変わらず初日に弱い。

積極果敢な宇良の相撲は、消極的な湘南乃海の相撲に勝っていた。今場所もよく動けそうな気配。貴景勝は全く相撲にならず御嶽海に土俵外へ運ばれた。15日間相撲が取れるようには見えなかった。同じく関脇に落ちた霧島は、霧島らしい相撲がスムーズに取れていて、王鵬を押し出し。

大の里は土俵際の足運びで辛うじて勝ちましたが、90%以上熱海富士の方が攻め勝っていた。豊昇龍は隆の勝に一方向的に押し出されてしまい、隆の勝は先場所の勢いが持続している感じがした。琴櫻は、攻めてくる平戸海をなんとか裁きはしたが、攻めがなく強さも巧さも感じられない。初日の取組の中から、15日間を通じて活躍して好成績を上げそうな力士は見つからなかった。

●二日目の印象

武将山が北勝富士に押し勝った相撲が光っていた。玉鷲は連続出場記録を伸ばしたものの二連敗。美ノ海・豪ノ山戦は見応えのある内容だった。実直な押し相撲ときちんとした四つ相撲のせめぎ合いは味わい深い。

若元春を寄り切った平戸海の相撲も、逃げたり変化したりしない「真面目な相撲」で、価値ある1勝を感じた。貴景勝は王鵬に敗れたが、土俵に上がる意味がないような体調と感じた。

霧島は落ち着いた取り口で熱海富士を退けて、好調さを感じさせる内容だった。

大の里と琴櫻も腰の座った安定した取り口を見せてきたし、豊昇龍も速攻相撲で大栄翔を寄り切り。

●三日目の印象

連続出場記録を更新し続ける玉鷲が、力強い押し相撲で輝を征し、ようやく白星を得た。

遠藤・美ノ海のセオリー通りのきちんとしたきれいな相撲は見ているだけでも気持ちが良い。

大の里の相撲は昨日から落ち着いた強い攻めになってきた。

平戸海の低い姿勢からの攻めに浮き上がってしまった阿炎は足場を失って転倒。

熱海富士の矢継ぎ早の攻めに翻弄された豊昇龍は早くも二敗で後退。

琴櫻・翔猿戦は土俵際のきわどい勝負で、「物言い」が付いて検証してもおかしくない状況だったが、誰からも手が上がらず、不満を露にした表情で花道を下がる翔猿が気の毒な感じがした。

三日目を終えて三戦全勝は、琴櫻・大の里・霧島・正代・遠藤・佐田の海の六力士だけになった。

相撲内容から見ると、霧島の相撲に安定感が見えるが、まだまだ残りは12日ある。

●四日目で見たもの

武将山・翠富士・美ノ海・若隆景・豪ノ山・平戸海など、さほど体の大きくはない力士たちが良い動きをしているのが今場所の特徴。先頭集団は4戦全勝の琴櫻・大の里・霧島・正代に絞られた。

攻めと守りのバランスで見ると霧島、守りから攻めに転じる琴櫻、右刺し前進の自分の型に戻ってきた大の里、毎度おなじみ何が出てくるかわからない正代の相撲、それぞれの個性で、場所を盛り上げてくれるのだろうか。中日まで行かないと、賜杯争いの流れが予想できない。

●五日目(序盤終了)

かくかくしかじかで序盤戦を終えたのだが……。

この日の相撲で見応えがあったのは、翠富士・美ノ海戦と宇良・明生戦。両力士が自分の持ち味を出し切って戦ったのが、観戦する側にも伝わって、どちらが勝ったか以上に印象に残った。

平戸海は見事な取り口で霧島を押し出し、4勝1敗で並んだ。琴櫻は力を付けて来た王鵬に完敗。

大の里は右差し左押っつけて直進して隆の勝を土俵外へ運び去った。

そして、序盤終了時点で全勝は大の里だけになってしまい、7人が1敗であとを追う形になった。

●六日目

全勝の大の里と1敗で今場所好調な正代の取組に注目が集った。しかし勝負は呆気なく終わった。

右を浅く差して左で強烈に押っつけて突っ走ったので、腰高の正代は浮き上がってしまい風船のようにふんわりと土俵外へ運び去られてしまった。右を差しただけで突っ走るのは危険なので左も使うべきだと相撲解説者が指摘することが多いが、それが耳に届いていたのだろうか。

霧島と琴櫻は難敵をあっさり退けて1敗を堅持、全勝の大の里を追うのはこの二人だけになった。

●七日目

序盤を過ぎて中盤に入ると、「今場所はいい感じだな」と感じて上向きになる力士がいたり、「おかしいな、こんな筈ではなかったのに」と思い悩む力士が出てくるように感じる。中日を過ぎると、中には「だめだこりゃ・・・」と投げやりになる力士も出てくるのかもしれないが、マイナス思考に陥る力士はまだ少ないのではないかな、と見た。

佐田の海・若隆景・遠藤・美ノ海などが気持ちの良い取り口で白星を積み上げた。

霧島・琴勝峰戦は、土俵際で琴勝峰が(しなくてもいいような)うっちゃりを見せて物言いとなったが、素人の目にも鮮やかに「琴勝峰の足」が蛇の目の砂に触れていたのがわかった。

大の里は平戸海に何もさせず、右差し・左おっつけて電車道。

豊昇龍は、昨日粗雑な相撲で4敗目を喫したが、これでようやく我に返ったのか、速攻で正代を一気に土俵外へ運び去った。琴櫻は若元春の理詰めで素早い攻めに屈して2敗に脱落。

中日を前に、全勝の大の里を追う1敗は霧島だけになってしまった。

●中日(八日目)

大の里は御嶽海を得意の形で素早く押し出し、ただ一人全勝で折り返した。霧島は落ち着いた取り口で難敵宇良を退けて1敗で追走。2敗には7力士が並んだ。

8戦全勝	7勝1敗	6勝2敗
大の里	霧島	琴櫻、遠藤、欧勝馬、若隆景、高安、錦木、北勝富士

十両では尊富士が全勝で独走しており、いつぞやの場所を思い起こすような景色になってきた。

●九日目 いよいよ後半戦

大の里は若元春に土俵際で粘られたが押し出して、好調さを感じる内容だった。右を浅く差して左は掌を旨く使って押っつけるという形が定着してきた。

琴櫻は宇良の正面からの一方的な寄り身に何もできずに土俵を割って脱落。

大の里・霧島の先頭争いの様相を呈して来たが、2敗同士の直接対決もあり、2敗で続くのが4力士に絞られてきた。

10日目の割りが発表され、大の里・霧島戦が組まれたが、現在の状況から見たらこの取組はもう少し

9戦全勝	8勝1敗	7勝2敗
大の里	霧島	遠藤、若隆景、高安、錦木

後に組んだ方が興行としても面白いのではないかと思う。またしても相撲協会(審判部)の無策さを露呈した。

●十日目

十両では、尊富士が無傷で先頭を走っていたが、東白龍に叩き込まれて1敗になり千代翔馬と並んだ。

十両の優勝争いは、2敗力士がないので、この二人に絞られた感がある。

高安・錦木・若隆景が2敗を堅持、遠藤は若隆景に敗れて後退。

相撲協会の失策と言える10日目の大の里・霧島戦は、大の里に凱歌が上がり星の差は二つに広がってしまった。霧島は立ち合いで変化して大の里の鋭い立ち合いの踏み込みを交わそうとしたが、大銀

10戦全勝	9勝1敗	8勝2敗
大の里		霧島、若隆景、高安、錦木

杏も結えぬ若手は冷静にこれに対処して得意の右差し左押っつけの形で元大関を寄り切った。

この取組を13日目ぐらいに組めば、相撲ファンの関心度が高まり、観客動員数も伸びて興行実績にもプラスの効果が期待できたと思うのだが……。

●十一日目 さて終盤戦に入ったが

十両の優勝争いは、尊富士(1敗)・千代翔馬(2敗)の先頭争いで、その後を3敗の二力士が追う。

十二日目に尊富士・千代翔馬の直接対決が組まれた。明日の一番でこの先が読めそうな状況。

幕内では、高安は両手突きで立ち合いで遠藤の出足を押さえて、そのまま「突き出し2敗を守った。

2敗同士の若隆景・錦木戦は、差し手を軸に攻めまくる若隆景を強引な小手投げで振り飛ばした錦木が勝利を収めた。

霧島は前日の失策を反省したような取り口で阿炎を征して2敗に踏みとどまった。

11戦全勝	10勝1敗	9勝2敗
大の里		霧島、高安、錦木

大の里はいつものパターンで琴勝峰を土俵際に運んだ。琴勝峰は土俵際で無理な叩き込みを試みて物言いとなったが、その前に琴勝峰の足が土

俵外に出ていた。琴勝峰はこういう相撲を改めなければ強くなれないとしばしば言われているが、悪癖は簡単には直らないようだ。結びと結び前の二番の大関戦は、観客席の盛り上がりは乏しく、しかも二人の大関が今日も完敗。もう先が見えてしまったと、ファンに見放された感じだった。

●十二日目 残りは四日だけ

十両では尊富士が千代翔馬を破って11勝1敗でトップ独走、続く千代翔馬は星二つの差(9勝3敗)。

幕内取組は、後半に賜杯の行方を占う取組が四番続いた。

錦木は大栄翔に良いところなく突き出されて脱落。

続いて高安が好調な若手平戸海を突き出した相撲は、高安の全盛時代を思わせる力強さがあった。

大の里はいつものようにやや高目の重心で攻めたが、一瞬できた脇の「あき」を見逃さなかった若隆景が二本差し込んで逆襲し、土俵際ぎりぎりまでの激しい攻防の末、大の里は1敗に後退。

「さすが若隆景!」と言いたくなるような見事な相撲だった。

11勝1敗	10勝2敗
大の里	霧島、高安

そして霧島は琴櫻を難なく下して、星ひとつの差で三人が並ぶ状態になった。ここまでの結果から見て、14日目か千秋楽に大の里・高安戦が組まれる可能性も出てきた。

●十三日目

2敗の高安が大栄翔に、良いところなく完敗、やや腰高になってしまった霧島は豊昇龍の切返しに転がされた。2敗の力士が二人とも脱落したあとで結びの一番を迎えた。この日の館内は、結びの一番だけを待っているようにも見えた。「琴櫻が勝つか大の里が勝つか?」が関心事ではなく、「大の里が勝つか負けるか?」の一点に極まっていた。

腰高気味な琴櫻が土俵際で際どい動きをしたため、物言いがつき「団体・取り直し」となった。

取り直し後の一番は大の里の得意の形による速攻相撲で、大関は抵抗もできずに土俵を割った。

1敗は大の里ただ一人、次に続く霧島・高安・錦木・若隆景は3敗なので、14日目に優勝が決まってい

もうかもしれない状況になった。

十両でも尊富士が1敗、千代翔馬が3敗と同じような景色になっているのが面白い。

●十四日目

翠富士・武将山、美ノ海・佐田の海、豪ノ山・御嶽海、若元春・琴勝峰、熱海富士・宇良、錦木・王鵬と内容のある一番が続いた。若隆景が大栄翔を寄り倒した一番は、久しぶりに見た若隆景らしい速さと巧さと厳しさがある相撲だった。3敗同士の霧島・高安戦は、激しい攻防の中で高安の膝がカクンと崩れて勝負が終ってしまった。そして、3敗力士が霧島・錦木・若隆景の三人となったのだが……。結びの一番、大の里素早い立ち合いから両手突きで前進し、圧倒的な圧力で豊昇龍を破った。かくして、大の里の二度目の優勝が14日目に決まってしまった。十両では尊富士の優勝が決まり、再び新しい風の襲来となった。

●千秋楽

昨日優勝を決めた大の里は、阿炎に引き落されて無様な千秋楽になった。立ち合いの右足の踏み込みがいつもより浅かった上に前傾姿勢が強かったので、やや重心が前へ行きすぎているようだった。

13勝2敗の優勝となってしまったが、敢闘賞と技能賞を手にした。

霧島は大栄翔を押さえて12勝3敗で締めくくり、来場所に引き継がれそうな「霧島の相撲」を見せてくれた。しかし千秋楽の結びの一番は「勝ち越しがかった大関同士の戦い」、いささか興ざめだった。

●場所を終って……

貴景勝が引退を発表した。照ノ富士もいつまで続くかはわからない状態。大関は二人とも、自分が目指す相撲の型がまとまらず、「大関としての強さ」が発揮できない状況。

そんな最中に「新しい大関の誕生」とはしゃぐ声も沢山聞こえてくるが、依然として危機的な状況は続いているように感じる。

いくらかの期待値を言うならば、若隆景・若元春・美ノ海などの正統派・正攻法の技能相撲を旨とする力士が増えてきたこと。平戸海・王鵬・翠富士・熱海富士など次に続く若手が力をつけて来ていることなど明るい素材もないわけではない。

新大関が誕生して、来場所が楽しみな力士が沢山現れてきたのは望ましいことだが、何となく手放しでは喜べない何かを感じられるのも事実。

以上